■ 第１回教育交流シンポジウム（教育交流　研究等助成事業）

教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるための、「国際教育交流会議（仮称）」のような、取り組みを行いたいというかねてよりの課題を、今年度は「第１回教育交流シンポジウム」と言う形で計画し実施しました。

日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

（１）シンポジウム実施計画

１．実施目的　○日本と中国の青年が、お互いの国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
○シンポジウムへの参加者も、発表者の発言を通して、日中両国の文化・教育等についての理解を深める。
○日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。

２．実施期日　2016年（平成28年）２月27日（土）

３．実施場所　日本教育会館会議室　９階　902号室

４．参 加 者　・日本と中国の青年（中国からの留学生、日本の学生、日本の若い教職員）
・協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般

５．コーディネーター
日中交流研究所：段躍中氏

６．発 表 者　第11回日本語作文コンクール最優秀賞受賞者：張晨雨さん

７．パネラー　日中それぞれ２人（男女各１名）計４名
・中国人留学生
第７回日本語作文コンクール受賞者　英国Leeds大学留学生　郭　　海
第10回日本語作文コンクール受賞者　西九州大学留学生　丁　亭伊
第11回日本語作文コンクール受賞者　西安交通大学　陳　星竹
・日本の学生
日中翻訳学院　「中国人の価値観」翻訳者　重松なほ
早稲田大学日中学生会議　松本　晟

８．選　　定　・留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募・選考する。
・日本人学生については、日中交流研究所と相談しながら公募・選考する。
・日本の若い教師については、各県の教職員への公募で選考する。

９．内　　容　パネルディスカッション的に、コーディネーターとパネラーでシンポジウムを構成する。
（意見発表と交流）

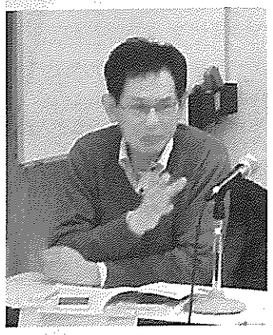
10．日　　程　（１部）
14：45　受付
15：00　交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
基調提案（張晨雨さん）
意見交流（パネラー）
総括（コーディネーター）
17：00　シンポジウム終了
（２部）
17：15　交流会（懇親会）

11．経　　費　・開催の諸経費は財団が負担する。

（２）シンポジウム内容報告

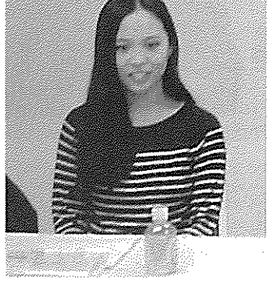
第１回ということで、「大々的なことよりも、膝を突き合わせた、より一人一人が触れあえるシンポジウムにしたい。」と考え20名程度での実施で計画しました。しかし、当日は予定を遙かに超えた30名もの参加者があり、とても充実したシンポジウムとなりました。

シンポジウムの様子

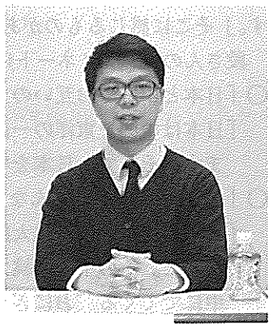

段躍中 さん

コーディネーターの段躍中さんには、とても的確な、またスムーズな運営をしていただきました。段さんが途中でパネラーのみなさんに、「ここでは思っていることは何でも話して良いんですよ。」とやさしく声を掛けてくれたことによって大いに話し合いを深めることができました。

張晨雨さんからは、作文の内容に触れて、「人のやり方にはそれぞれ原因がある。それをきちんと知れば、いろいろと考えを理解できる。」という話がありました。日本での感想については、「普通の日本の人々との出会いで色んな事を学んだ。」「日本人の仕事に対する真剣さを知った。」「国会近くでデモをしていた人たちと平和のことなど話してみたかった。」「日本人の中で中国語を話す人のレベルはすごいと感じた。自分も日本語をもっともっと勉強していきたい。」「中国の歴史も紹介したい。」「日本人もかつてヨーロッパで爆買をしたと聞いた。」「日中関係も何時か治ると感じた。」等の話がまずありました。


張晨雨 さん

郭　海さんからは、現在英国に留学中と言うことで、日本と中国について、英国にいて思うことが話されました。「日本社会の自由さについて驚いている。」「日本の歴史認識については、英国よりも研究のレベルが高いと感じている。」「中国では近現代史の資料は、簡単に目にすることはできない。」「中国は日本を異文化だとは思っていない。日本は中国を異文化だと思っている。」「第７回の作文コンクールでは、“消費文化”について取り上げた。」「将来は、日中の架け橋になりたい。」等の発言がありました。発言の中で英語も混ざり、まさに“トライリンガル”であることに、特に日本人の参加者は驚かされました。


郭　海さん

丁亭伊 さん

丁亭伊さんからは、日本のACG（アニメ・コミック・ゲーム）への興味から入ったことが話されました。その中で、日本をもっと知りたい、日本語を習いたいと発展して、日本語作文コンクール応募や留学に至ったと話されました。留学して最近感じたことでは、「高校生のデモを見て、日本の自由さに驚いた。そして、日本の高校生達の市民意識にも驚いた。自分たちが国の主人公だという考え方が素晴らしい。」という発言がありました。留学というせっかくの機会を大いに生かして、もっともっと日本について勉強したいという趣旨の発言がありました。それから、丁さんの大学での研究テーマは、「外国人労働者の支援活動」だということでした。

陳星竹さんは、現在交換留学生として慶応大学へ通い日本語の勉強をしているそうです。大学では「日中友好フリーハグ」の活動をしていて、自分でポスターを作り、観光客の多いところなどへ出掛けてハグの取り組みをしているそうです。

その活動を通しながら、お年寄りだけでなく日本人みんなの優しさや親切さを感じたことを話してくれました。また、日本の自由さについて、「日本の新聞はそれぞれ自分の考えを持って評論している。」と感じていることを話してくれました。「大学を卒業したら又日本に来たい。」「ジャーナリストになるために頑張りたい。」と話してくれました。

陳星竹 さん

重松なほ さん

重松なほさんは、翻訳出版した“中国人の価値観”に触れながら話をしてくれました。「なぜ自分が中国、中国語、翻訳と関わるようになったのか。」という中で、“天安門事件”の直前に両親と北京にいたこと（まだ小学生だった）、その後、現在まで何回も中国を訪れていることなど、中国との事について発表していただきました。そうした中で、一番感じていることは、「中国ではなぜ自由に発言ができないのか。」ということだと発言されました。大変多くの問題を含んだ問いかけでした。「今後も翻訳を通じながら、中国に、日中のことに関わっていきたい。」という決意が述べられました。

松本　晟 さん

松本　晟さんは、早稲田大学日中学生会議の活動を通しながら、「日中の関係を学生の視点で考えたい。」と取り組みを進めている話をしてくれました。日中学生会議は30年間の活動の歴史の中で沢山のOG・OBを排出していて、各方面でその力を発揮してきていることも紹介してくれました。「日中関係は、とかくその時々の政治的な動きに大きく影響される。しかしながら、この活動でお互いの理解を深めるきっかけを作れればと、考えている。」との発言がありました。「北京大学へ留学して、学生達といろんな話をする。ドラマ・アニメ・アイドル・音楽等の若者文化（ソフトパワー）については、本当に自然に楽しく会話ができる。しかしながら政治や外交・ODA等の話になると、どの学生もみんな同じにものすごく真剣な様子で政府の主張と同じ事をはなす。」そこに感じるものがあると話してくれました。

段さんのコーディネートにしたがって、開場からの質問や意見もだされました。

○「日本と中国のお互いの文化を捉える認識の違いとは何か？」

「日本は中国を東洋の一部だと認識していると思います。中国は日本を世界の一部として認識していると思います。そして、日本を中国の下位の国と考えています。」

○「ACGと私の中でどんなことを書いたのか？」

「日本のアニメの“桃太郎伝説”に関わることを書きました。私は体が弱かったので家でよくアニメを見ていました。その中で“桃太郎伝説”を知り、そしてそのアニメに勇気づけられました。お母さんが、アニメの中にでてくる“おにぎり”を作ってくれたことがありました。それで、元気になりました。」

○「日中の歴史観の問題をどう乗り越えていったら良いか？」

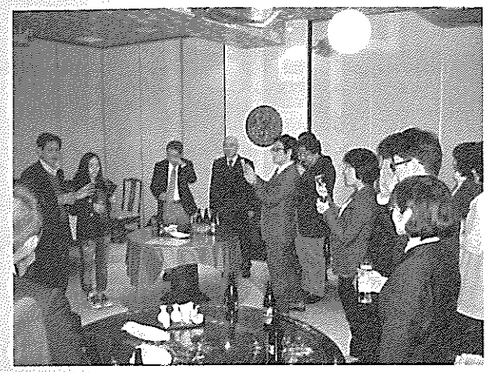
「武漢で、日本人の友達と日中戦争に関わる展示を見に行ったことがあります。日本の友達はそれを見てとても驚いていました。何があったのかという歴史のことは忘れないけれど、問題は誰の責任なのか、そしてこれからのことはどうするのかだと思います。」「国と歴史のことは極めて重要だと思います。日本には、右翼的な愛国主義はないと思います。日本人・中国人ではなく、一人の人間として生きた方が良いと思います。」

○「反日・抗日ドラマを見て、実際の日本人とどう感じますか？」

「反日・抗日ドラマは、小中学生の頃には影響が大きいです。しかし、高校生になり自分の主義が育ってくると違います。」「以前の反日・抗日ドラマに登場する日本人の日本語のレベルがとても低かったです。」「反日・抗日ドラマにもいくつものレベルがあります。中には良い評判のものもあります。」「マスコミの責任が大きいと思います。くだらない反日・抗日ドラマを見てそれを信じる中国人もいます。くだらない反日・抗日ドラマを使って、それを信じさせようとしていると日本のマスコミがいたずらに大きく取り上げ、それを信じる日本人もいます。でも今はいろんなメソッドがあります。ネット等で情報が取れるようになってきました。中国の中でも、知りたいことが知れるように少しずつなってきています。学校の教科書で反日・抗日のことが出てくるのは、せいぜい２～３ページです。でも日本のマスコミは、それを煽っていておかしいです。」

○「これからの日中交流等について一言話してください。」

「日本の若者はあまり海外に出たがらない。マスコミの報道にも原因があるのかも知れない。より多くの人に訪中してほしい。」「今日のシンポジウムのようにもっともっと交流を増やしていけたら良い。」「日本語文化は独特の美しさで素晴らしい。もっともっと勉強して伝えていきたい。」「ある方向にとらわれない歴史解釈の選択肢は沢山有ると思う。」「これからのキーワードとして、学生としては理解・マスコミ関係には発信・各種業界等団体には支持が大切ではないかと思う。」



交流会の様子

■ 第11回日本語作文コンクール（教育交流　研究等助成事業）

2015年度第11回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の180校から4737編の応募がありました。

今回の日本語作文コンクールのテーマは３つあり、

(1)　戦後70年の今年、日中の青年交流を考える「日中青年交流について」

(2)　中国の若者の視点で、日本の理解できない点を説明する「なんでそうなるの？」

(3)　“第１回日本語教師「総選挙」in中国”といった趣で、自分の日本語指導教師のすぐれた点を紹介する「わたしの先生はすごい」

でした。戦後70年をふまえた中国の若者ならではの主張や、若者の本音がうかがえるような意義のあるユニークなテーマが選ばれました。

協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）２編を選出しています。本年度の教育賞は、郭　可純さんの「声」と莫　泊因さんの「日中文化のつながりを構築しよう」でした。

★教育賞・日中国際教育交流協会賞（５万円相当）

中国人民大学　　郭　可純

華南理工大学　　莫　泊因

（１）教育賞受賞作品

テーマ①　日中青年交流について

声

中国人民大学　郭　可純

「三十万人の中国人が殺された」。南京大虐殺記念館を見学したとき、あちこちにこんなスローガンが掲げられていて、しんと静まっていた。私は憤りと悲しみの空気に包まれ、呼吸さえはばかられるほど、物思いに沈んでいた。

戦争が終わり70年が経つ。現在、私たち青年は、日中問題について自分の目で見ることより、テレビのニュースや前の世代の回想、ドラマの中の銃声と泣き声などを通して、間接的に耳で聞くことのほうが多い。そのため、日本人に一度も会ったことのない中国の青年の中には、若い頃から「日本人は悪人だ」というイメージを持っている人もいる。

幸いなことに、私の大学の専門は日本語であり、多くの日本人と付き合う中で、生の意義深い声を耳にする機会に恵まれた。

2015年１月、私は日本大使館の中日友好成人式に参加した。ゲストは矢野浩二さん。彼は中国のあるテレビ番組の司会者として、いつも流暢な中国語で私たちを笑わせてくれるが、この日は日本語で話し始めた。日本人なのに日本語で話すことに新鮮な違和感があってみんな笑った。彼をはじめ、数多くの日本人が、全精力を傾けて自分の声で発信をし、日中のよりよい関係を築こうとしていることを、再認識する機会になった。

先学期から、私はインターネットで日本語キャスターというアルバイトを始めた。これは日本人向けのホームページで、ある話題について話したり歌ったり、視聴者と交流したりする番組を生放送する仕事だ。最初は日本人の視聴者は中国人のキャスターを認めてくれないのではないかなと不安だったが、実際にやってみて、視聴者の方々の親切さに感動した。彼等はいつも一生懸命応援してくれて、「うんうん、そうなの」と相づちを打ったり「かわいいね」と褒めてくれたりしながら、聴いてくれた。そして、放送が終わった時に「楽しい時間ありがとうございました。」「日中友好の架け橋ですね！」と労ってくれたこともたびたびあった。このような経験から、私は自分の声を通じて、日本の方々に中国の大学生の活力や生の姿を伝えたり、中日友好の思いを言葉にしたりして、民間交流に少しでも貢献できるように頑張っていこうと決心した。

私の心には、これまでに付き合ってきた日本人の友達のさまざまな楽しげな声が響いている。初めて日本人留学生と相互学習した時、日本語と中国語とを織り交ぜ、身振り手振りでコミュニケーションした時の笑い声、北京のメイド喫茶店でアルバイトをしていた日本人の毛毛が「中国人のオタクを育てたい！」とお客さんに大きな声で伝えた願い、学校の中日交流会で「マジカルバナナ」というゲームをやっているとき、日本人の奈帆ちゃんが「すばらしいといったら、中国」と言った後みんなが上げた歓声など、すべて心に焼き付いている。これらの声がお互いに共鳴しあい、私の胸の中に一つの楽章を作っている。

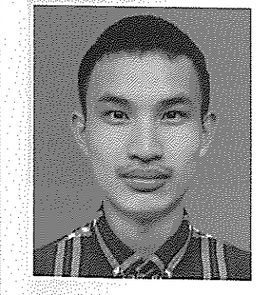
近年、冷え込んだ日中関係の影響か、両国の青年の間に嫌悪や攻撃、デモの声などが絶えず飛び交っているのも事実である。しかし、それは、両国の一人一人がお互いの心の声を聞こうとしないからではないだろうか。相手の本音を聞かずに、自分の立場をすべてだと思い込み、先入観や偏見に満ちた声をあげる人はあまりにも多い。その結果、「日本人は最悪だ」、「中国はいやだ」といった言葉を数多くの青年が深く考えずに口にしているように思う。

もし皆が私のように、友好の声に耳を傾ける機会があれば、きっと相手を深く理解し、共通点を見つけ、中日関係を改めて考え直せるのではないだろうか。正しい歴史認識を心に刻むことは確かに大切だが、両国の青年がお互いに理解し合えるように、主体的に相手の真の声に耳を傾け、自分もまた積極的に声を出し、心のこもった交流をすることがなにより必要だと信じている。

テーマ①　日中青年交流について

中日文化のつながりを構築しよう

華南理工大学　莫　泊因



「キャップはパチンと音がするまでしっかり閉めて下さい。」

これは私が初めて覚えた日本語だ。「こんにちは」ではなく、三菱の水性ペンのキャップに書いてあったその文だ。日本語が全く分からなかった私には、漢字と仮名を混ぜたその文に興味にそそられ、その意味を調べたり、何度も書いてみたりした。それがいわば日本語との出会いが始まったころだ。今になって思えば、その出会いは日中の緊密な経済交流のおかげだ。

愛用者が多いため、パイロットや三菱鉛筆の文房具が常に中国の書店の一角を閉めている。文房具のみならず、ニュース放送ための撮影機材、中国全土で走っている日本車、人気を博したラーメンと寿司……このように、日本製品が中国人の日常生活に浸透し、欠かせない存在になっている。

しかし、もし中日戦争が再び勃発し、両国の関係が氷点まで冷え込むと、日本製品の文房具まで売り場から姿を消し、日本料理店も閉店することが余儀なくされるのだろう。日本と関わっているものはすべて中国人の日常生活から排除され、経済のつながりが切られてしまうことも予想される。

だが、ただ一つ、切っても切れないつながりが残っている。それは文化だ。

前日、日本への郵便の送り状を郵便局員に見せた時、「日本の地名には漢字が多いな。日本人は中国のいいところをパクっているんだね」と言われた。確かに、中国から伝来した日本語の骨格を務めている漢字が欠落すると、日本語は成り立たないのだろう。また、漢字だけではなく、仮名も、中国の草書から派生したものだ。日本語の源流が中国語にまで遡ることができると言えよう。

もし、日本が中国のいいところをパクっているといったら、中国も同じく日本のいいところをパクっていることになる。現代中国語の中に、日本から逆輸入された言葉が多く見られる。よく知られている「物理」や「哲学」のほか、「経済」や「時間」なども中国語で使用頻度が高い言葉だが、実はそれは和製漢語だったという。

中国語の不可欠な一部となっているこれらの和製漢語は、パクリより中日両国の途絶えることのない文化交流の証であると言えよう。たとえ戦争を引き起こされたとしても、日本が漢字を廃棄し、中国が「時間」や「文明」といった和製漢語を辞書から抹消することはしないのだろう。中日両国の文化のつながりは、想像以上に強靭なものだ。

この数十年、アニメ、ゲームやドラマは次第に漢字や漢語の役を受け継ぎ、新たな文化のつながりとなっている。

ウルトラマンに熱狂していた小学時代の私にとって、日本はしばしば怪獣や宇宙人に襲われていた国であり、それを恐れずに戦う科学特捜隊の勇士の故郷でもある。中学に入ってから、私は『太閤立志伝』というゲームを通じて、織田信長や豊臣秀吉を知り、日本が風雲児の輩出する国だと思うようになった。このように、日本への理解が徐々に深まってきて、真の日本像が浮き彫りになってきたのだ。

しかし、それはまだ不十分だ。

アマゾンで中国文学のベストセラーを調べてみたら、出てきたのが『西遊記』や『三国志』のような古臭いものばかりで、現代中国文学の傑作の邦訳がいっこう見つからない。また、日本で中国社会の現状を描いた作品は稀であり、中国への理解を深めるのは難航していると言ってよい。中国マネーが日本に進出しているのに対し、中国の文化は日本まで伝わっていない。もし「中国についてどう思いますか」という質問を日本の方々に投げると、帰ってくる答えは、おそらく五千年余りの歴史を持つ絢爛たる中華文明ではなく、意味不明な言葉で声高に話したり、ゴミを散らしたりする中国人の姿だろう。文化交流が進まない限り、中国に対する誤解は深刻化の一途をたどるに違いない。

文化交流というのは、一方通行ではない。中国への理解を深めてもらうためには、お互いの文化の発信力強化が必要なのだ。一青年としての私は、そのために身に付けた日本語を生かし、微力ながらも中日両国の誤解を解く事業に捧げていきたいと思っている。

■資　料

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
会報 NO. 22　　2015. 5. 1

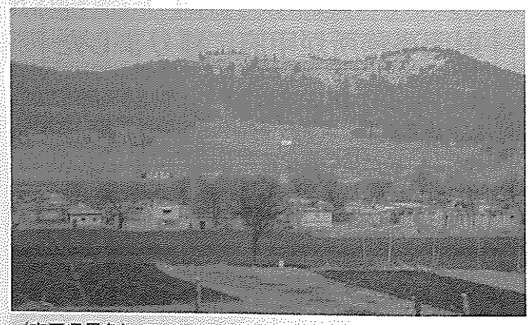
共生力

HP：http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/
Tel：055-269-6533　Fax：055-269-6534
〒400-0031　山梨県甲府市丸の内2-32-16
甲府丸の内マンション302
発行人：黒田文男

「新プロジェクト」の開始へ
山東省泰安市東平県を視察

3月22日～24日に、協会代表（黒田文男代表理事・赤岡業務執行理事・芹沢秀行理事）は、中国宋慶齢基金会との「新たな教育交流プロジェクト」の開始に向けて、中国を訪問しました。

23日には、基金会の劉穎さん・袁振雅さんと共に山東省泰安市東平県への視察を行いました。東平県までは、北京市（北京南駅）から高速鉄道で１時間30分（済南西駅）、さらにバスで１時間30分程の道のりでした。済南西駅では、東平県教育局の劉立新局長・史桂玲主任・王志強主任に出迎えていただきました。



（東平県景色）

美しい自然や豊かな文化に恵まれている東平県には東平湖、水滸伝映画・テレビ城、萬里故居、羅貫中記念館などの有名な観光スポットもあります。黄河の北に広がる大地には、小麦畑が広がり、梅や桃・林檎畑も見られました。しかし、経済発展から見ると、東平県は大分遅れていて、山東省における経済が遅れている30県の一つになっています。東平県は、町11・共同体３・村716で構成されていて、総面積は1343平方㎞、総人口は79万人

（１）会報「共生力」 22号、23号

だそうです。学校数は、小学校134校、中学校20校、高等学校３校、私立高校１校、専門学校・教員研修センター・特別支援学校がそれぞれ１校で、小学生37620人、中学生20770人、高校生7923人で、教職員数は6674人（教員5664人）だそうです。2012年に「東平県教育振興計画」が発布され、今後三年間の教育振興の全体構想・目標・重点任務等が明確にされ、3.68億元を投資し、指導・体制・教育投資等の全面的で強力な教育改革を推進していく予定だそうです。

（裴洼小学校の様子）

最初に訪れたのは、大洋鎮裴洼小学校でした。大洋鎮は東平県の北に位置し、経済発展の遅れから、学校建設等も隣接県より一段と厳しいそうです。校門の所で、裴召文校長先生をはじめ沢山の関係者が出迎えてくれました。裴洼小学校には幼稚園を入れて８つのクラスがあり、小学生は261人で、教職員は20名でした。子どもたちは明るい笑顔で挨拶してくれ、真剣な表情で学習に取り組んでいました。学校の教育環境を整えようと努力しているようですが、課題が沢山あるとのことでした。

次に接山鎮夏謝小学校を訪れました。接山鎮は都市部から離れた山岳地帯に位置していて、経済基盤が弱く、財政収入も県内で最下位で、学校のインフラ建設は非常に遅れているそうです。夏謝小学校は、接山鎮の北に位置し、350人の小学生と18人の教職員がいました。資金難に直面していると言うことで、1970年に建てられた校舎は安全上の問題も懸念されていました。

黒田代表理事と井頓泉副主席との意見交換で今後のプロジェクトの進め方を確認

協会代表の３人は、24日に中国宋慶齢基金会を訪問し、井頓泉副主席と今後の協力体制について確認しました。

会談では唐九紅基金部長、王プロジェクト処長・劉副所長と今後の活動について率直な意見交換を行いました。

井　東平の視察お疲れ様でした。貴協会の素晴らしい取り組みについて、心から感謝しています。お互いの信頼関係を大切にし、行動で人のつながりを作っていきましょう。

黒田　今後の取り組みについて、まず、易県での教育交

流は、一定の成果が確認できたので、ここで打ち切りにしたいです。そして、東平における教育交流を新に始めたいと思います。今年の９月に当協会の中心的なメンバー15人ほどで、東平を訪れたいです。そして、来年は東平の先生方に日本来てほしいと考えています。

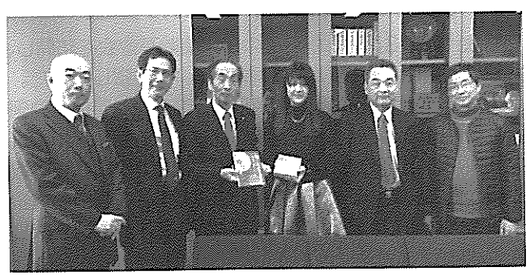
井　わかりました。中日友好70年の歴史に相応しい、両国のためになる訪問団になって欲しいと思います。責任を持って受け入れ喜んで大歓迎します。来年の訪日団もしっかり取り組み、大いに成果を上げるようにしましょう。東平は私の故郷です。孔子様、水滸伝、萬里等沢山の有名な人物がでています。中国には発展による格差が出ています。それは西に行くほど酷いです。中国は日本から教育のシステム・精神・子どもの育て方等謙虚に学ばなければいけないと考えています。

黒田・井　協会と基金会のこの交流を大切にしていくことを確認しましょう。　（文責：赤岡）

（井副主席・黒田代表の会談）

日本語作文コンテスト最優秀賞・教育賞の姚儷瑾さんが輿石参議院副議長（協会顧問）を表敬訪問！

2014年度第10回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の196校から4133編の応募がありました。最優秀賞・日本大使賞（日本一週間招待）・教育賞（協会賞）は、姚儷瑾さん（東華大学）の「ＡＣＧと日中関係」が受賞しました。姚儷瑾さんは２月上旬に来日し忙しい日程をこなしましたが、そうした中２月４日（水）当協会の顧問で参議院副議長の輿石東参議院議員を表敬訪問しました。国会見学・議員食堂での昼食等の輿石副議長の心遣いに大感激の様子でした。



（輿石参議院副議長と姚儷瑾の記念写真）

フジ国際語学院卒業式
ホームステイ参加の学生達も

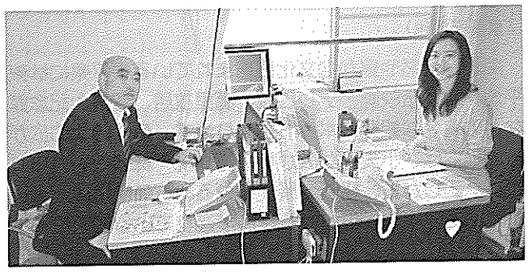
（卒業式記念写真）

３月５日、フジ国際語学院（山中小白代表・財団評議員）の卒業式に出席し、日本留学生の卒業を祝いました。担任による卒業生の呼名、返答と起立、花束・呼びかけ等の先生への感謝の表現、代表者による証書の授与と先生方と学生とが喜びの中でひとつになる卒業証書授与式は、厳かで凛々しくそして温かく、まことに感動的でした。学生たちの主体的な取り組みによるパフォーマンスは、温かく素直で、まことに感動的なものでした。先生方への感謝を見事なで演出すると共に、日中友好の架け橋になるという決意が感じられ、感動的なものでした。また一昨年・昨年、教育交流ホームステイin山梨に参加した学生たちもそれぞれ優秀な成績で希望校に進学しました。ホームステイで得た貴重な体験を今後の生活・人生の中で生かしていってくれると思います。

式では中国大使館一等書記官（教育）譚　永東氏、元重慶総領事瀬野清水氏が挨拶を行ないました。協会からは赤岡業務執行理事が出席しました。

財団事務所が甲府に移りました

昨年の10月より財団の事務所が、山梨県甲府市に移りました。設立以来、東京都千代田区に置かれていた財団の事務所が、新たな事務局体制で運営するために、山梨県甲府市丸の内に移されました。事務局は、業務執行理事（赤岡）と事務職員（石川）の２人となりました。住所等は、「共生力」の表題にあります。今後ともよろしくお願い致します。



（甲府の協会事務所の様子）

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
会報 NO. 23　　2015. 11. 20

共生力

HP：http://ajciee.or.jp/
Tel：055-269-6533　Fax：055-269-6534
〒400-0031　山梨県甲府市丸の内2-32-16
甲府丸の内マンション302
発行人：黒田文男

視察研修訪中団派遣
泰安市東平県の小学校を視察

９月23日～26日に、視察研修訪中団として各県代表を中心に14名（含む黒田文男代表理事・赤岡業務執行理事）が、中国宋慶齢基金会との「新たな教育交流プロジェクト」の開始に向けて、中国山東省泰安市東平県の教育視察を行いました。宋慶齢基金会からは、担当責任者の劉穎さん・担当スタッフの袁振雅さんが同行しました。

最初に訪れたのは、東平県第４実験小学校でした。校門を入ると、きちんと「制服」を身につけた上級生だと思われる児童代表が、校長先生方と一緒に出迎えてくれました。そして、しっかりとした口調に身振りも交えて、小学校についての様々な紹介をしてくれました。校舎に入ると早速に音楽室に案内され、高学年の授業を見せていただきました。音楽の専科を担当している中堅と思われる男性教師が、熱心にリズム指導を行っていました。視察研修参加の先生方は、それぞれが授業に対する感想を持ちながら、今後の音楽教育を中心に据えた教育交流について考えることができました。

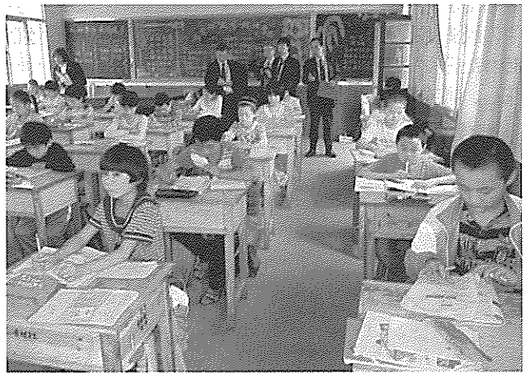
（高学年の音楽授業の様子）

その後、他学年の他教科の授業の様子も見学し、第４実験小学校での視察研修を終えました。外国の教育関係者による学校視察は初めてということで、地元の放送局の取材なども受けました。入学希望者も多いそうで、一つの授業が60人から70人くらいで行われていたのには驚かされました。孔子の像が建つ校舎正面で、関係者と記念撮影をおこない、その後第４実験小学校を後にしました。

次に訪れたのは、大洋鎮裴洼小学校でした。校門の所で、裴召文校長先生をはじめ沢山の学校教育関係者が出迎えてくれました。先に訪れた市中心部にある第４実験小学校とは対照的に、農村部にある裴洼小学校は、教育設備等の課題を抱えていることが、視察研修の中で確認できました。各学年とも授業に取り組む姿勢が意欲的で、視察研修参加のメンバー全員が感心させられました。

教育局の担当者との懇談会では、学校運営に係わる諸事項（職員・組織・人事・カリキュラム・日課・施設設備等）について、多くの質問が出されたり、日中それぞれの教育実践についての交流が行われ、大いに研修としての意義が深まりました。話し合いの中で「音楽教育については、オルガン等の楽器もなく、ただＣＤをかけて歌わせるだけのような、とても音楽授業とは呼べない実態です。」と言う教育局の体育音楽教育担当者からの発言に、今後の教育交流・支援のありかたについて考えさせられました。

授業中とはかわって、明るく人なつこい笑顔の子どもたちに手を振りながら、大洋鎮裴洼小学校での視察研修を終えました。



（大洋鎮裴洼小学校の中学年授業の様子）

東平県視察研修に先立ち
宋慶齢基金会を訪問

視察研修訪中一日目、山東省東平県での視察研修を行う前に、北京市内の中国宋慶齢基金会を訪問しました。黒田代表と唐九紅基金部長とを中心に、今後の取り組みについて意見交換をしました。

新たな取り組みについて、易県での成果を踏まえ、東平における教育交流プロジェクトを、共同して始めることが確認されました。また、来年度は、実践交流を含めた第17次訪中団を、さらに、再来年には教育交流訪日団を東平の先生方を中心に組織し実践交流を行うことが話されました。具体的には、今回の視察研修を踏まえて事務レベルで詰めていくことも確認されました。

（宋慶齢基金会会議室で）

視察研修
宋慶齢故居・魯迅故居・泰山
盧溝橋・抗日戦争記念館訪問

今回の訪中では、日中の交流の歴史に触れる研修として、北京市内にある中華人民共和国名誉主席宋慶齢の故居（溥儀の父親の邸宅）と魯迅故居・魯迅博物館を訪ねました。多くの歴史的資料に接し日中の歴史についても研鑽が深まりました。また、泰安市においては中国五岳の一つで、道教の聖地でもあり、中国の人々の熱い信仰の対象でもある世界遺産の名峰「泰山」に登りました。北京市－泰安市の往復には、中国高速鉄道に乗車して中国経済技術発展を体感してみました。さらには、今訪中の最重要視察研修として、戦後70年の節目の年という意義も踏まえ、盧溝橋と抗日戦争記念館を訪れました。日中の歴史上重要な場所を訪れ、両国にとって最も不幸であった日々について認識を深めました。記念館正面で献花し、犠牲者の霊を慰めました。

（抗日戦争記念館前にて）

第４回ホームステイin山梨大成功

『田中一郎記念奨学基金』の事業として実施してきた中国人留学生のホームステイ事業を今年度も実施しました。第４回ホームステイは、８月７日（金）から９日（日）までの３日間で、山梨県の教職員家庭（現職６・退職１）をホストファミリーとして行いました。参加希望が多数でしたが、今年度も募集人員を７名にしぼり実施しました。まとめの会での発言や報告書・感想文を読んでも、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとっても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。

（教育会館での交流会後の記念撮影）

「孫中山・宋慶齢と日本」パネル展
オープンセレモニーへ参加

10月24日（日）から、東京中国文化センターにおいて、「孫中山・宋慶齢と日本」と題するパネル展が宋慶齢基金会によって開かれました。オープニングには、黒田代表理事と赤岡業務執行理事が出席しました。孫文と日本とのつながり、宋慶齢と孫文そして日本との関わりが、写真と解説のパネルによって、詳しく照会され、大いに価値ある展示会でした。孫文が日本に来て110年、孫文と宋慶齢が日本で結婚して100年という節目の年にあたるという説明があり、改めて、当時の日本の進歩的人々と中国の意識ある人々との関わりを確認することができました。

内閣府による財団への立ち入り
検査（監査）が行われました

９月16日（水）に、本財団に対して内閣府の「公益財団法人に対する立ち入り検査」が行われました。内閣府参事官補佐と政策企画調査官の２人が、事務所を訪れ、午前10時から午後４時まで、約６時間にわたって、事業内容・財務内容・諸規定の整備・諸帳簿等の管理・ホームページ等の広報・登記・内閣府への報告等について細部にわたって検査しました。当日は、赤岡業務執行理事と石川事務職員で対応しました。検査のまとめとして、「公益財団として有意義な価値ある活動をされていることがわかりました。続けてがんばってください。」と、前向きな評価をいただきました。

お知らせ
「ホームページのアドレスが変わりました！」
プロバイダーとの新たな契約によって、ホームページのアドレスが、以下のように変わりました。
http://ajciee.or.jp/　日本中国国際教育交流協会
で検索を掛ければでてきます。

■ 機関関係

（１）2014（平成26）年度事業報告

１．教育交流・派遣事業

① 第16次訪中団は、９月12日（金）から17日（水）までの日程で、上海市を中心に行いました。各県より15名の参加があり総勢19名（含む：通訳・添乗員）で実施しました。中国側の受け入れは、宋慶齢基金会（上海福利会）で、宋慶齢基金会の小中学校での学校視察及び授業参観・交流会を行うことができました。また、在外教育施設での国際理解教育という観点から、上海日本人学校の小・中・高等学校視察及び授業参観も実施しました。上海市及び南京市の見学は、近現代における中国と日本との交流という観点から、孫文（南京中山陵にて献花）・宋慶齢・魯迅・内山完造に係わる史跡等について研鑽を深めました。また、南京虐殺記念館での研修においては、あらゆる視点から日中関係の過去をしっかりととらえるという意味で、大いに意義がありました。さらには、犠牲者への献花も行い、日中関係発展の過去から未来への決意を示すこともできたと思います。

② 安東自由大学への参加については、当初計画されていましたが、今年度は取り組みを実施しませんでした。準備体制が整わなかったことや、第７期までの参加によって、一定の成果が確認できたので、今後どうするかについては、また検討していきたいということになりました。

③ ３月22日～24日に、協会代表（黒田文男代表理事・赤岡業務執行理事・芹沢秀行理事）は、中国宋慶齢基金会との「新たな教育交流プロジェクト」の開始に向けて、中国を訪問しました。基金会よりの提案で、山東省泰安市東平県の小学校への視察を行いました。視察を踏まえて、基金会の井頓泉副主席との話し合いを行う中で「新たな教育交流プロジェクト」を東平県で行う方向で確認し、改めて９月には、協会からの視察団（15名規模）を東平県に派遣することを約束しました。

２．教育交流・受入事業

① 第４次宋慶齢基金会教育代表団の訪日受入れに関して、黒田代表理事ら協会理事３名は、中国宋慶齢基金会を訪問し、諸準備の開始を確認しました。内容的には、東平県への教育交流・支援事業を踏まえたかたちで、音楽教育の研修を主とする訪日団を平成28年度を目途に実現していきたいと言うことで、基金会の井頓泉副主席との話し合いを行う中で確認した。

② 中国教育国際交流協会、中国宋慶齢基金会、教育工会及びその他の教育諸団体から派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受け入れについては、今年度は特にありませんでした。

３．教育交流・支援事業

① 中国宋慶齢基金会との共同プロジェクト第６回易県音楽教師養成研修（音楽教師培訓）が、中国河北省易県で、８月21日から３日間にわたって行われました。研修は、３名の講師を招き、易県各地の小中学校より120名もの教師が参加して行われました。今年度支援費の中から購入した笛も参加者全員に用意され、養成研修の一つとして大いに役立ちました。３日間の研修は、声楽の基礎、発声、笛演奏、研修内容は、合唱・器楽の指導方法といった児童生徒への授業ですぐに取り組めるよう実践的・具体的なものでした。音楽教師養成というプロジェクトの目的にそった研修で大いに成果を上げることができたと思います。今年度はその諸経費として100万円を８月初旬に送金しました。

② 教育機器の支援については、「新たな教育交流プロジェクト」の開始に関わって、平成27年度に行っていくことで確認しました。

４．教育交流・研究等助成事業

① 2014年度第10回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の196校から4133編の応募がありました。本年度のテーマは「ＡＣＧ（アニメ・コミック・ゲーム）と私」、「公共マナーと中国人」の二つで、いずれの作品からも、次世代の中国を

担う若者たちが前向きで柔軟性に富んだ考え方をもっているということが感じ取れました。協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）の２編を選出しました。本年度の教育賞受賞者は、姚儷瑾さん（東華大学）の「ＡＣＧと日中関係」と徐曼さん（南通大学杏林学院）の「中国人マナー改革の鍵」でした。

② 『田中一郎記念奨学基金』の事業として、一昨年度から行ってきた中国人留学生のホームステイ事業を今年度も実施しました。第３回ホームステイは、８月８日から10日までの３日間で、山梨県の教職員家庭（現職６・退職１）をホストファミリーとして行いました。今年度は、留学生側からの強い要望を受けて、募集人員を７名に増やしました。また、３日目の午前中に、笛吹市内の地域活動篠笛サークルの小学生と交流したり、退職教職員によって行われている「NPOまなびの広場ふえふき」の先生方に日本の折り紙体験を行っていただきました。最終日のまとめの会での発言の中にも、終了後提出してもらった報告書や感想文を読んでも、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとっても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。

③ 国際教育交流会議の開催については、日中の若者の意見交流に焦点を当てて、平成27年度に開催する方向で計画が動き出しました。

５．その他の活動

① 今年度は理事会を５回、評議員会を３回、監査を１回開催しました。また５月19日、評議員選定委員会を開催しました。

② 広報関係では、平成27年１月に『会報21号』を発行し、「共生力」（随時刊）は、20（５月）・21（12月）号を発行しました。

③ 昨年の10月より財団の事務所が、移りました。設立以来、東京都千代田区に置かれていた財団の事務所が、新たな事務局体制で運営するために、山梨県甲府市丸の内に移されました。事務局は、業務執行理事（赤岡）と事務職員（石川）の二人となりました。

④ 財政確立に向けて事務局会・常務理事会・理事会・評議員会で意見集約を行い、具体的な取り組みを開始しました。

⑤ 中国大使館主催「建国50年記念式典」、フジ国際語学院卒業式に参加しました。

（２）2015（平成27）年度事業計画

協会は昨年度、上海市・南京市における第16次の訪中団を組織し、草の根教育交流をより深く、多様に発展させるとともに、大きな成果をあげました。第６回となる河北省易県での音楽教師養成セミナーは年を追うごとに研修内容が充実しており、音楽を通じて、地域の教育発展、教育の格差是正の大きな力となっています。また、第３回となる中国人留学生と日本の教職員家庭との友好を深める「教育交流ホームステイ」事業は経験を重ね、参加した学生ばかりでなく、受入れたホストファミリーを基盤に、地域での日中友好、相互理解の輪を広げています。さらには、日本語作文コンクールへの後援を始め、当協会が協賛して行っている取り組みについても、大いに意義あるものとなっています。

協会の持続可能な活動を発展させるため、今年度は下記の教育交流事業を推進します。

１．教育交流・派遣事業

① 音楽教師研修事業をさらに発展させるため、易県地域でのプロジェクトに区切りをつけつつ、新たな該当地域への教育支援についての取り組みを進めます。

② 新たなプロジェクトの推進にあたって、代表者による視察研修を行います。

２．教育交流・受入事業

① 中国教育国際交流協会、中国宋慶齢基金会、教育工会及びその他の教育諸団体が派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受入れ手配等を行います。

② 2016年度をめどに、現場教師を中心とした「第４次宋慶齢基金会教育代表団」受入れのための検討を進めます。

３．教育交流・支援事業

① 「音楽教師養成セミナー」への支援を継続します。

② 教育機器の支援は、新たなプロジェクト実施地域の実情をふまえて検討します。

４．教育交流・研究等助成事業

① 日本語作文コンクール（日本僑報社・日中交流研究所主催）の後援を継続します。

② 第４回教育交流ホームステイを実施します。

③ 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため、国際教育交流会議等を検討します。

５．機関運営などに関して

① 理事会、評議員会を年２回、監査委員会を年１回、常務理事会・事務局会を随時行います。

② 年会報22号を発行します。また、『共生力』を随時発行します。ホームページの充実を図ります。

③ 『公益財団法人制度改革・役員選考委員会』を継続し、事業の発展のための意見を出し合うとともに、役員等の選考、協会の組織についての検討を進めます。

④ 事業推進に関する理解を図りながら会員を拡大し、よって財政基盤の確立を図るために、引き続き組織的な取り組みを進めます。

（3）2015（平成27）年度収支予算

平成27年４月１日から平成28年３月31日まで　（単位：円）

科　　目	27年度予算案額A	26年度予算額B	26年実績(見込)	増減(A-B)	備　　考
Ⅰ 事業活動収支の部					
1.事業活動収入					
① 基本財産運用収入	20,000	20,000	40,000	0	
基本財産運用収入	20,000	20,000	40,000	0	
② 特定資産運用収入	3,000	3,000	5,450	0	
田中一郎記念奨学基金	2,000	2,000	3,000	0	
教育交流積立金	300	300		0	
訪中派遣費用準備資金	200	200	1,700	0	
教育交流支援費用準備資金	500	500	750	0	
③ 会費収入	6,800,000	6,800,000	7,380,000	0	
1.団体会費収入	6,700,000	6,700,000	6,930,000	0	
2.個人会費収入	100,000	100,000	450,000	0	
④ 寄付金収入	0	0		0	
寄付金収入	0	0		0	
特別寄付金収入	0	0		0	
⑤ 事業収入	1,870,000	2,350,000	2,770,000	-480,000	
1.教育交流・派遣事業	900,000	2,300,000	2,700,000	-1,400,000	プロジェクト視察
2.教育交流・受入事業	0	0		0	
3.教育交流・支援事業	900,000	0		900,000	プロジェクト打ち合わせ
4.教育交流・研究助成事業	70,000	50,000	70,000	20,000	10,000×7（ホームステイ）
⑥ 雑収入	0	0	1,283	0	
雑収入	0	0		0	
受取利息	0	0	1,283	0	
事業活動収入合計	8,693,000	9,173,000	10,196,733	-480,000	
2.事業活動支出				0	
① 事業費支出	7,500,000	18,966,000	12,866,809	-11,466,000	
(1) 教育交流・派遣事業	2,695,000	10,600,000	8,060,315	-7,905,000	
1.給料手当	570,000	780,000	405,400	-210,000	総額の12分の3
2.会議費	20,000	25,000	0	-5,000	打合せ 委員会 参加者会議 会場費など
3.交際費	10,000	60,000	116,088	-50,000	記念品代など
4.旅費交通費	1,500,000	8,500,000	6,414,646	-7,000,000	訪中旅費 役員交通費 アルバイト費 会議参加費他
5.通信運搬費	30,000	60,000	23,510	-30,000	通信料 電話 郵便 メール便など
6.消耗品費	3,000	3,000	2,631	0	
7.印刷製本費	200,000	200,000	120,839	0	印刷 会報など
8.賃借料	350,000	470,000	499,813	-120,000	総額の約12分の3
9.委託費	10,000	500,000	474,688	-490,000	通訳等委託
10.雑費	2,000	2,000	2,700	0	
(2) 教育交流・受入事業	825,000	1,504,000	1,075,240	-679,000	
1.給料手当	380,000	520,000	422,100	-140,000	総額の12分の2
2.会議費	20,000	20,000	0	0	交流会議 打合せ 会場費など
3.交際費	10,000	10,000	0	0	記念品代など
4.旅費交通費	100,000	500,000	321,080	-400,000	役員交通費 アルバイト費 会議参加費ほか
5.通信運搬費	30,000	40,000	48,249	-10,000	通信料 電話 郵便 メール便など
6.消耗品費	3,000	2,000	0	1,000	
7.印刷製本費	50,000	80,000	76,321	-30,000	印刷 会報など
8.賃借料	220,000	310,000	207,490	-90,000	総額の約12分の2
9.委託費	10,000	20,000	0	-10,000	通訳等委託
10.雑費	2,000	2,000	0	0	
(3) 教育交流・支援事業	2,725,000	4,238,000	2,504,533	-1,513,000	
1.給料手当等	380,000	520,000	273,000	-140,000	総額の12分の2
2.会議費	20,000	30,000	27,993	-10,000	打合せ 委員会 参加者会議 会場費など
3.交際費	10,000	55,000	0	-45,000	記念品代など
4.旅費交通費	1,000,000	1,000,000	720,200	0	役員交通費 アルバイト費 会議参加費ほか
5.通信運搬費	30,000	50,000		-20,000	通信料 電話 郵便 メール便など
6.消耗品費	3,000	3,000	43,893	0	
7.印刷製本費	50,000	160,000	100,407	-110,000	印刷 会報など
8.賃借料	220,000	310,000	298,820	-90,000	総額の約12分の2
9.委託費	10,000	100,000	32,400	-90,000	通訳等委託
10.教育支援費	1,000,000	2,000,000	1,000,000	-1,000,000	宋慶齢基金会との共同プロジェクト
11.雑費	2,000	10,000	7,820	-8,000	送金手数料など

科　　目	27年度予算案額A	26年度予算額B	26年実績(見込)	増減(A-B)	備　　考
(4) 教育交流・研究等助成事業	1,255,000	2,624,000	1,226,721	-1,369,000	
1.給料手当等	380,000	520,000	380,000	-140,000	総額の12分の2
2.会議費	20,000	30,000	20,155	-10,000	研究会 打合せ 会場費など
3.旅費交通費	100,000	550,000	206,028	-450,000	役員交通費 アルバイト費 会議参加費ほか
4.通信運搬費	30,000	40,000	37,771	-10,000	通信料 電話 郵便 メール便など
5.消耗品費	3,000	2,000	813	1,000	
6.印刷製本費	50,000	120,000	112,491	-70,000	印刷 会報など
7.賃借料	220,000	310,000	159,463	-90,000	総額の約12分の2
8.謝金	100,000	50,000	0	50,000	講師謝礼など
9.研修助成費	350,000	1,000,000	310,000	-650,000	作文コンクール ホームステイなど
10.雑費	2,000	2,000	0	0	
② 法人費支出	3,225,000	3,635,000	3,634,671	-410,000	
1.給料手当	570,000	780,000	779,200	-210,000	総額の12分の3
2.会議費	150,000	150,000	117,682	0	理事会 評議員会等会場費 打ち合わせなど
3.交際費	200,000	100,000	64,860	100,000	慶弔費など
4.旅費交通費	850,000	850,000	389,420	0	役員交通費 アルバイト費 理事会 評議員会旅費など
5.通信運搬費	50,000	100,000	86,472	-50,000	通信料 電話 郵便 メール便など
6.什器備品費	20,000	100,000	91,800	-80,000	パソコン資金など
7.消耗品費	20,000	50,000	66,839	-30,000	修繕費を含む
8.印刷製本費	50,000	30,000	2,677	20,000	会議資料印刷など
9.賃借料	560,000	560,000	815,978	0	総額の約12分の3 ほか
10.租税公課	5,000	5,000	1,000	0	
11.委託費	700,000	860,000	1,189,367	-160,000	日本パートナーズ会計 ホームページ作成など
12.雑費	50,000	50,000	29,376	0	
事業活動支出合計	10,725,000	22,601,000	16,501,480	-11,876,000	
事業活動収支差額	-2,032,000	-13,428,000	-6,304,747	11,396,000	
Ⅱ 投資活動収支の部				0	
1.投資活動収入				0	
① 基本財産変更差額収入	0	20,000,000	20,000,000	-20,000,000	
基本財産変更差額収入	0	20,000,000	20,000,000	-20,000,000	(H25/600万をH26年度活動費に 120万を教育交流積立金へ)
② 特定資産取崩収入	1,000,000	4,000,000	3,000,000	-3,000,000	
教育交流積立金	0			0	(H26/H25年度末300万)
訪中派遣費用準備資金積立	0	2,000,000	2,000,000	-2,000,000	(全額(残り１回分)を取崩)
教育交流支援費用準備資金積立	1,000,000	2,000,000	1,000,000	-1,000,000	総額480万(残り2年分)の内200万を取崩
③ 敷金保証金戻り収入	0	0	478,800	0	
敷金戻り収入	0	0	478,800	0	東京事務所解約敷金戻り
投資活動収入計	1,000,000	24,000,000	23,478,800	-23,000,000	
2.投資活動支出				0	
① 特定資産取得支出	0	12,000,000	15,000,000	-12,000,000	
訪中派遣費用準備資金積立	0			0	
教育交流支援費用準備資金積立	0			0	H27予算積立なし
田中一郎記念奨学基金積立	0			0	
教育交流積立金	0	12,000,000	15,000,000	-12,000,000	H26事業費未使用分300万円積立
② 固定資産取得支出	0	0		0	
什器備品購入支出	0	0		0	
③ 敷金保証金支出	0	0	32,000	0	
敷金支出	0	0	32,000	0	山梨事務所敷金
投資活動支出計	0	12,000,000	15,032,000	-12,000,000	
投資活動収支差額	1,000,000	12,000,000	8,446,800	-11,000,000	
Ⅲ 財務活動収支の部				0	
1.財務活動収入	0	0		0	
財務活動収入計	0	0		0	
2.財務活動支出				0	
財務活動支出計	0	0		0	
財務活動収支差額	0	0		0	
Ⅳ 予備費支出	0	1,272,000		-1,272,000	
当期収支差額	-1,032,000	-2,700,000	2,142,053	1,668,000	
前期繰越収支差額	4,959,011	2,816,958	2,816,958	2,142,053	
次期繰越収支差額	3,927,011	116,958	4,959,011	3,810,053	
Ⅴ 当期一般正味財産増減額の部	-2,032,000	-13,428,000	-6,304,747	11,396,000	
一般正味財産期首残高(見込概数)	73,000,000	73,000,000	73,101,744	0	
一般正味財産期末残高(見込概数)	70,968,000	59,572,000	66,796,997	11,396,000	
Ⅵ 当期指定正味財産増減額の部	0	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	0	
Ⅶ 正味財産期末残高(見込概数)	70,968,000	59,572,000	66,796,997	11,396,000	

（4）2015（平成27）年度役員・評議員名簿

公益財団法人日本中国国際教育交流協会　理事・評議員・監査・顧問

（2015年12月１日現在）

理　事（９名）

赤　岡　直　人（業務執行理事）

伊　藤　宏　美

黒　田　文　男（代表理事）

鈴　木　伸　昭

芹　沢　秀　幸

初　岡　昌一郎

前　嶌　徳　男

山　中　正　和

渡　邉　泓　美

監　事（３名）

祝　迫　規　之

中　村　武　志

丸　　光　昭

評議員（７名）

井　上　定　彦

宇佐美　　真

梶　原　　貴

清　水　秀　行

田　嶋　晴　美

別　所　勝　也

山　中　小　白

顧　問（２名）

輿　石　　東

生　井　榮　一

■ 協会の歩み

設　　立　1991年１月
1992年財団法人認可
2010年８月５日公益財団法人認定
公益財団法人移行　2010年８月９日
創 立 者　田中　一郎（初代理事長）
理 事 長　生井　榮一（第２代）
代表理事　黒田　文男（第３代2010年４月～現在）

教育交流・派遣事業

1992　私立学校教職員訪中団（北京、大連）、第１次教育訪中団（北京、杭州。李鉄映国家教育委員会主任と会見）
1993　第２次教育訪中団（北京、瀋陽、撫順、大連。倪全人大常務副委員長会見）
1994　第３次訪中団（昆明、成都）
1995　第４次教育訪中団（ウルムチ、トルファン）、協会理事訪中団（北京。国家教育委員会、中国教育国際交流協会訪問）
1996　第５次教育訪中団（済南・青島、蘇州）
1997　第６次教育訪中団（日中国交正常化25周年、財団設立５周年記念北京、天津、常州、蘇州。朱国家教育委員会主任と会見）
1998　第７次教育訪中団（北京、ハルピン、長春）
1999　第８次教育訪中団（南京、杭州、上海）
2000　第９次教育訪中団（昆明、大理、麗江）
2001　第10次教育訪中団（西寧、西安）
2002　第11次教育訪中団（日中国交正常化25周年記念。南寧、桂林）
2004　第12次教育訪中団（北京、承徳）
2006　第13次教育訪中団（北京、天津）
2007　第１期安東自由大学参加団（韓国・安東市）
2008　第14次訪中団（北京、河北省易県）
　　第２期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2009　第３期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2010　第15次訪中団（北京、河北省易県）
2011　第５期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2012　第６期安東自由大学参加団（韓国・安東、大邱、ソウル）
2013　第７期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2014　第16次訪中団（上海・南京）
2015　視察研修訪中団（北京・泰安市東平県）

教育交流・受入事業

1992　中国教職員訪日代表団（東京、三重、神奈川、愛知、茨城、山梨、千葉、静岡）
1993　寧波市訪日団（東京、茨城、群馬、千葉）、常州市訪日団（兵庫、福井、三重）、寧夏自治区訪日団（愛知、富山、新潟）、中国教育国際交流代表団（東京、神奈川、静岡、神奈川、京都、奈良、兵庫、大阪。赤松文相と会談）
1994　江蘇省小学校長訪日団（神奈川、山梨、静岡）
1995　湖南省訪日団（愛知、静岡、三重）、蘇州市訪日団（千葉、神奈川、山梨）
1996　モンゴル赤峰市職業教育代表団（東京、北海道）、常州市訪日団（千葉、山梨、東京）卒業生就職指導訪日団
1997　日中国交正常化25周年、財団設立５周年記念教育交流訪日団（東京、愛知、三重）
1998　蘇州市・昆山市訪日団（東京、福井、千葉）常州市訪日団（東京、山梨、三重、京都、奈良、大阪）
1999　北京市第二実験小学校訪日団（東京、神奈川、京都、大阪）中国優秀教師訪日団（東京、静岡）
2000　雲南教育学会訪日団（東京、山梨、千葉）
2001　中国教育交流訪日団（東京、山梨、奈良、京都、大阪）
2002　中国特殊教育工作者代表団（東京、三重）
2003　北京市崇文区教育関係者訪日団（東京、山梨）
2006　協会設立15周年記念中国教育国際交流訪日団（東京）遼寧省体育訪日団（東京、神奈川、滋賀、大阪）
2008　中国宋慶齢基金会教育代表団（第１次）（東京、静岡、愛知、京都）
2009　中国宋慶齢基金会李寧秘書長、協会を訪問
2011　協会設立20周年記念中国教育国際交流協会訪日団、中国宋慶齢基金会教育代表団（第２次）（東京、神奈川）
2012　中国宋慶齢基金会唐聞生副主席、協会を訪問
2013　第３次宋慶齢基金会教育交流代表団（三重、京都）

教育交流・支援、助成等の事業

1995　中国人日本留学生に奨学奨励金制度を設ける
1996　雲南省災害教育復興資金（100万円）を贈る
1997　協会設立５周年記念教育交流集会・レセプション（東京）
1998　長江水害見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じて贈る。松花江水害見舞金（50万円）を黒龍江省教育委員会を通じて贈る。
1999　韓国中学校教育協議会名誉会長厳圭白博士と田中会長・理事長会見
2001　中国教育国際交流協会20周年式典で、田中会長・理事長が顧問に就任。協会設立10周年記念教育交流集会（文部省後援、東京）
2002　日中国交正常化30周年記念教育交流集会・レセプション（文科省・中国大使館教育処後援、東京）
2006　協会設立15周年記念教育交流集会・レセプション（文部省・中国大使館教育処後援、東京）協会代表、中国宋慶齢基金会、河北省易県を訪問。
2007　生井理事長が中国宋慶齢基金会胡啓立主席と会談。河北省易県小学校へ机椅子600セット及び電子キーボード40台（総額200万円）の教育支援及び音楽教師養成セミナー支援。協定書締結。第３回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。
2008　四川大地震に対し、見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じ四川教育国際交流協会へ。同じく見

舞金（50万円）を宋慶齢基金会を通じて贈る。また、ミャンマーサイクロン被害見舞金（50万円）をビルマ日本事務所を通じて送る。第４回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。日本教育公務員共済会より易県教育支援に関し、本部奨励金（100万円）を受ける。

2009　第１回音楽教師養成セミナー参加（北京、河北省易県）第５回「中国人の日本語作文コンクール」後援。

2010　公益財団法人日本中国国際教育交流協会へ移行。第２回音楽教師養成セミナー支援・参加（70万円）、第６回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。

2011　第３回音楽教師養成セミナー支援・参加（100万円）。第７回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテンスト協賛。東日本大震災支援「こども音楽再生基金」へ寄附（100万円）。

2012　協会代表（黒田代表理事）以下４名が中国宋慶齢基金会（李寧秘書長）、中国教育国際交流協会（林佐平副秘書長）、中国教育科学文化衛生体育工会（万民東主席）を訪問。第４回音楽教師養成セミナー支援（250万円）。第１回教育交流ホームステイ（in 山梨）実施。第８回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテンスト協賛。

2013　第５回音楽教師養成セミナー支援（200万円）（黒田代表理事、会員代表ら８名参加）。第２回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第９回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。

2014　協会代表（黒田理事長）以下３名が中国宋慶齢基金会（井頓泉副主席）、中国教科文衛體工會全國委員會（白立文國際代表）を訪問。第５回音楽教師養成セミナー支援（100万円）送金。第３回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第10回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。

2015　協会代表（黒田理事長）以下３名が中国宋慶齢基金会（井頓泉副主席）を訪問。第４回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第11回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。山東省泰安市東平県教育支援（100万円）。第１回教育交流シンポジウム開催。

（2016年２月現在）

公益財団法人日本中国国際教育交流協会とは

◆日本中国国際教育交流協会は

1991年に創立。東アジアの豊かな未来を実現するために、日本と中国を柱として、教育交流事業を進めています。子どもや教育の持つ「共生力」に限りない期待を寄せています。

◆公益財団法人とは

広く公益に資する事業を進めている法人として2010年内閣府から認定を受けました。公益法人は、寄付金に税はかからないので、支援がしやすいのが特徴です。

◆教育交流は４つの分野で

１　派遣

教育に関心のある人たちによって構成された協会が派遣する団で、学校見学、授業の交流、子どもや教職員との交流を行い、未来の東アジアを地球規模で考えます。

２　受入

諸外国からの教育関係の訪日団を受け入れ、学校訪問等を行い、教職員や子どもたちとの交流を深めています。訪日団の希望に沿って、教育現場の協力を得た研修への参加ができます。

３　支援

教育困難地域の学校に、机や椅子などの学校備品のほか、電子キーボードなどの教育機器を送っています。また送った機器を使って授業が進められるための研修を支援しています。支援を受け入れる団体は、行政または信頼のおける団体です。

４　研究等助成

田中一郎奨学基金を設立し、東アジアを中心に国際的な教育交流を担う人材を育成します。また、「日本語作文コンクール」「教育交流ホームステイ」などを通して、海外や日本で日本語を勉強している若者の学習を助成しています。

◆東アジアでのこの素敵な教育交流への参加をお待ちします。

個人会員	年会費	一口　5,000円
団体会員	年会費	一口 10,000円
賛助会員	年会費	一口　3,000円
寄付金	随時	

会員、寄附をされた団体・個人には、協会の年会報、「共生力」（随時発行の会報）、海外派遣への先行連絡、イベントのご案内など差し上げます。

【編集後記】

盧溝橋から見た川面に、悠々と切れ間なく流れる日中の歴史が、映し出されているように思われました。「許すことはできても　忘れることはできない」の言葉は、抗日戦争記念館の多くの展示の中にもしっかりと息づいていました。

「日中を中心とした東アジアから、さらには世界へと、教育交流の確かな実績を築いていこう。」「人と人のつながりを大切に、温かな血の通う民間交流を進めていこう。」の志の元に、今年度も取り組みを行って参りました。第22号の会報として、その一年間の歩みをまとめました。是非ともご覧いただき、多くの建設的なご意見と、活動・取り組みへのご協力を、今後とも当協会にいただけますよう、よろしくお願い致します。

■公益財団法人日本中国国際教育交流協会【会報第22号】

2016年（平成28年）３月24日発行
発行人…黒田文男　表紙題字…田中一郎（創立者）　印刷…（株）アートプリント
〒400-0031　山梨県甲府市丸の内2-32-16　甲府丸の内マンション302
Tel.055-269-6533　Fax.055-269-6534
HP：http://ajciee.or.jp/